

## シリーズ

## 「N先生の津軽三味線」(第6回)

青森に赴任した際に、筆者は津軽三味線を覚えた。

きっかけは元々ギターを少し嗜み、三味線にも興味があったからだ。もちろん「人を愛し、土地を愛し、仕事を愛する」という(旧)内務省三訓にしたがい、まずはその土地の文化に親しんでみようと思ったからでもある(なお兵庫に来てからは、主としてジャズバーと神戸牛に親しんでいる)。

三味線という「チン、トン、シャン」のイメージだが、これは主にお座敷芸としての細棹・中棹の音色であり、津軽三味線とはまるで異なる。津軽三味線は、ボサマ(男性の視覚障がい者)の門付け芸をルーツとして始まったもので、津軽の囂々たる地吹雪の中でも音が聞こえるよう太棹を使い、皮も猫皮ではなく強靱な犬皮を張った上で(だから津軽三味線弾きは犬に嫌われるという)叩きつけるようにして弾くことで、より大きな音を出した。その結果、あの心を震わせるような音色を持つ津軽三味線が完成したのである。

曲目の定番は、三大民謡である「じょんから節」「よされ節」「小原節」のほか「あいや節」「三下がり」、また入門曲・合奏曲としては「六段」などがある。じょんから節も新節、中節、旧節といった種類があり、それぞれにテンポはもちろん、味わいもかなり異なるのが面白い。

津軽三味線はソロで弾くのも格好いいが、その真骨頂は「唄付け」にある。唄付けは唄い手、三味線、太鼓の三人が組んで行う合奏だが、西洋音楽のような楽譜が存在しないため、三味線と太鼓は、唄い手の息づかいに集中しながら、もっともよいタイミングで唄に演奏を合わせていかなければならない。このジャズのアドリブに近いスリリングさは、なかなかゾクゾクさせるものがある。

さて、そんな三味線を手に取り、いざ演奏を！ 目指すはじょんから節！ などと意気込んで練習を始めた筆者だったが、早速「いい音が出ない」という壁に当たってしまった。

筆者に津軽三味線を教えてくれたのは、当時八十歳になるベテラン奏者で、自ら唄も歌われるN先生だった。N先生は筆者に比べると体も小さく、腕もずっと細かったのだが、ひとたび三味線を手にすると、筆者とは比べ物にならないほど大きな音で、カーンと澄んだ音色を奏でる。筆者も

見よう見まねで撥を振るうのだが、ベチベチとねちっこい音がするばかりで、そんないい音は一向に出る気配がない。

一体、N先生と自分とでは何が違うのだろうか？ 悩む筆者を見かねてか、先生はひとつアドバイスをくださった。「無心になるんだよ」

無心。ははあ、なるほど、無になるのか——と心を空っぽにして打った撥は、弦にすら引っかけず空を切った。N先生は、大いに笑いながら言った。「無心ってのはね、無で弾いても音の勘所を外さないよう、研鑽を積むってこと。眠っていても弾けるくらい、練習しなさいな」

そのお言葉に、筆者はふと論語の一節を思い出した。

「十有五にして学に志し、三十にして立ち、四十にして惑わず、五十にして天命を知る。六十にして耳順い、七十にして心の欲するところに従いて矩を踰えず」

志学や不惑の語源になった有名な節であり、七十を従心、すなわち「思うまま振る舞っても道理に外れることはなくなった」年齢であると教えている。

思うままの心でも道に外れない。無で弾いても音を外さない。N先生も七十を過ぎていますが、まさしく、長く三味線を弾き続けてきた先生であればこそ至った従心の境地にあるのだろう。

そういえば、この教えは、安全衛生にも当てはまる。労働災害撲滅のためには不安全行動・状態を起ささないことが必要だが、そのための特効薬や王道などなく、ただ日々の努力のみが求められる。何事も考えずとも安全行動・状態ができる境地に至ったとき、労災ゼロもまた達成されるのだろう。

—— 一昨年、N先生の訃報を受けた。

咽喉癌だったという。切ってしましましょうと薦めた医者に、N先生は「声帯を痛めて唄えなくなってしまうのは嫌だ。私は一生涯、芸人でいたいです」とおっしゃったと聞いた。

筆者も一生涯、何かでいたいと思いつけることができるだろうか—— そんなことをしみじみと思いながら、なかなか練習ができないまま家で眠っていた津軽三味線を引っ張り出し、久しぶりに一の糸を叩いてみた。

ベチ、といかにも不味い音がした。